

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名
富山大学人間発達科学部発達教育学科
- ・所属ゼミ
志賀ゼミ(社会福祉)
- ・指導教員
志賀文哉
- ・代表学生
高嶋理沙
- ・参加学生
油谷美咲、磯部裕佳、本堂亜美、吉村祐美

【研究課題名】 地域で社会的弱者を支える仕組みの検討およびその構築

1. 課題解決策の要約

本研究が対象と考えた社会的弱者のうち、「一人暮らし」「高齢者」「生活困窮」といったキーワードが関係する人たちの地域生活を調べた結果、現状の制度・サービスでは対応できない生活の課題には、新しい支援やまちづくりが必要と考えられる。

一人暮らしで高齢にいたった時に、個として自立した生活を営むことは容易ではなくなっている。今回協力いただいた方々は、健康の課題・不安を抱えている人が少なくなく、また見守りの必要や引きこもり予防などの課題への対処のため、地域を上げて支えることが必要になっている。団塊の世代が75歳以上の「後期高齢者」となる約10年後の2025年までに一層そのニーズは高まると予想される。国家が進めるCCRCとも関連付けながら本研究を継続発展する中で、地域包括ケアシステムとも親和的な地域コミュニティの基盤が形成されることが期待される。

2. 調査研究の目的

本研究では、予定の活動を通して社会的弱者の地域生活課題を明らかにし、課題解決に向けた仕組みを考え、その仕組みの構築を図ることを目的とする。

3. 調査研究の内容

本研究において行った4つの活動については以下のとおりである。

①一人暮らし高齢者の家庭訪問

A) 活動の目的

近年、高齢化が進むにつれて、一人暮らし高齢者が増えている。今後も一人暮らし高齢者が年々増加傾向にあり、それと同時に頼れる人がおらず、地域で孤立してしまうなどの問題も増加し、緊急時への対応も課題となってくる。家庭訪問を行うことで課題を発見し、一人暮らし高齢者が安心して暮らしていくために必要な支援を考える

ことが目的である。

B) 活動日

第1回 2015/7/21(火) 14:30～

2015/7/22(水) 13:00～

第2回 2015/12/8(火) 14:45～

C) 活動の内容

富山市内で一人暮らしをしている M さん(70 代男性)のお宅に延べ3回訪問し、生活環境や生活の様子を見学し、課題を探る。第1回と第2回の訪問での変化を見る。

D) 活動の考察

M さんは、会話はできるものの、ときどき言葉に詰まる場面が見られた。そして1回目と2回目の訪問には変化があった。1回目の訪問では見られなかったが、2回目の訪問では訪問してすぐに障害者手帳を自ら見せてくれた。それは自身が上手く話せないことを、受け入れ始めているということの表れだと感じた。

次に、高齢者の一人暮らしの問題点に気づいた。蛍光灯が一部つかなくなっていたと M さんが言っておられたが一人で取り替えるには困難であり危険であるため、取り替えずそのままになっていた。これは高齢者の一人暮らしにとってリスクになっている。また、ヘルパーさんに頼もうとしても24時間ずっといるわけではないし、女性のヘルパーさんでは替えることが難しいので、それも1つの課題であると思った。

他には、緊急時に迅速に連絡できる手段がないので緊急通報システムの設置が必要だと思った。だが M さんは緊急通報システムの存在を知らなかった。M さんのようにこういったシステムの存在を知らない高齢者が多くいるのではないかと思った。

E) 活動の課題

緊急通報システムを知らないが必要としている人たちにどう周知していくかが1つ課題として挙げられる。また、一人暮らし高齢者は孤立しやすく、リスクも多いので、いつでもすぐに頼れる人の存在が必要であり、地域での交流を進めていくことも課題である。

<指導教員のコメント：訪問活動>

ソーシャルワークにおいて、訪問活動と言えば、かつて英国で始まった COS の友愛訪問が想起される。本研究では、地域で一人暮らしをしている方から協力を得て、二度訪問して生活の様子を教えてもらう機会を得た。こうした訪問活動は実習を除いて学生にはまだ経験が少なく、変化を捉えるにもまだ不慣れである。訪問活動を通して生活の困難を察知し、予防的に対処していくには一定程度の訪問を継続的に重ねて行う必要があると考えられる。学生は、地域での一人暮らし高齢者の実態がよくわかるころまでは到達していないと思われるが、見えにくさ・分かりにくさの事実気づいたとすれば一歩前進ではないかと考える。

②カフェ活動

A) 活動の目的

一人暮らし高齢者が、同じ一人暮らしの高齢者や大学生など普段あまりかかわることのない人との会話を通して、生活の課題を共有できる機会をつくる。

B) 活動日・時間

第一回 10月27日(火) 14:00～16:00

第二回 11月24日(火) 15:00～17:00

第三回 1月12日(火) 9:00～11:00

C) 活動の内容

第一回の活動では飲み物とお菓子を用意し、学生 3 人と先生が高齢者の方 3 人とお話しした。以前、喫茶店を経営しておられた方の参加があり、経験を生かしてコーヒーを淹れてくださった。また、学生が通う大学の話や、参加者の方が若かった頃の街の様子についての話をした。

第二回の活動では大学の農場で収穫された食材などを用いて、さつまいもご飯と豚汁をつくって食べた。高齢者の方 7 人と先生、学生 3 人が参加した。参加者の方数名が積極的に調理してくださり、できあがったものを全員でいただいた。第一回より参加人数が多く、食事しながらの活動ということもあり、携帯電話やマイナンバー制度の話などをした。

第三回の活動ではおしるこお茶を用意し、学生 4 人と先生が高齢者の方 5 人とお話しした。また、活動中に「これまでのカフェ活動の感想」と「今後への期待」について、参加者を対象にうかがった。

D) 活動の考察（感想・学びを含む）

第二回の活動中、参加者の一人が「みんなで食べるとおいしいね」と言っておられた。普段は一人暮らしということもあり、人と一緒に食事する機会が少ないと思われる。また、人とのかわりという点においても、普段は生活を支える支援者や身近な人とのかわりが多いと思われる。そのため今回のような活動は、一人暮らしの高齢者にとって、私たち学生を含め、普段あまりかかわることのない人との会話を楽しむことのできるよい機会になっていると考えられる。実際に第三回の活動では、「これまでのカフェ活動の感想」として、「とてもいいと思う。自分は一人暮らしで人と会って話をする機会が少ないから、このような活動はとてもありがたい。」という感想があがった。参加された皆さんが同じように思ってくださっているわけではないが、実際に参加された方からこのような感想を頂けたという点でも、今回行ったカフェ活動には意味があったと考える。

また、世間話から生活の困り事の相談に至ることもある。実際に今回の活動中にも、携帯電話の操作について困っているという話を聞いた。私たち学生は福祉や医療の専門家ではないため対応できる相談は決して多くはないが、話を聞くことはできると感じた。携帯電話のような小さな困り事や改めて話すほどのことでもない小さな不満を話すよい機会になっているとも考えられる。

さらに、私たち学生にとっても有意義な活動であった。学生の多くは高齢者と関わる機会がほとんどない。そのため高齢者の方がされるお話の中には、とても興味深いものがいくつもあった。高齢者の方のための活動ではあるが、私たち学生にとっても得るものが多くある、バランスのとれた活動であると感じた。

E) 活動の課題

参加者の中には、あまり会話に入ってこられない方がおられた。私たち学生としても、年が離れていることもあり、話題に困ることもあった。第二回の食事を含めた活動では、比較的会話のきっかけをつかみやすかったが、内容の工夫次第でさらに有意義な活動になると感じた。高齢者の方と学生が共に楽しめることという視点をもって、活動の内容を吟味していく必要があると感じた。

活動の内容の具体的な案としては、参加された方の声が参考になると考える。実際に調理の機会を含めた活動をもっとしてほしいという意見があった。男性の方の一人暮らしでは、料理をしたくてもやり方が分からないということもあることが分かったので、私たちのできる範囲で、活動を決めていくことが大切であると考えた。

<指導教員コメント：カフェ活動>

2015年10月～2016年1月までの研究期間中に、高岡市で3回の相談会を「カフェ活動」の呼称で実施できた。カフェ活動は富山県下でも「認知症カフェ」が実施されるようになってきているが、市町村社会福祉協議会でのサロン活動は以前からあり、ひきこもり・社会的孤立予防の取り組みとしては新しいものではない。ただ、そのような既存の活動に対して、どこまでの範囲の人を包摂できているかを問えば、さしあたり、生活困窮者(ホームレスを含む)に対するものは広く展開するのが容易でないといえる。制度や仕組みがあってもその情報にアクセスできなかつたり、スティグマの影響で参加に二の足を踏んだりすることがある。

本研究では、学生が加わった話やすい居場所づくりの観点で、生活の困りごとを理解し、それに対処していく場の構築を目指したものである。この場に参加する人たちは、本研究以前から別の相談会に参加してきた人たちがベースで、事前にカフェ活動のお知らせをして任意の参加を得たものである。

③シェア金沢訪問

A) 活動の目的

日本版 CCRC 構想では、高齢者は健康な段階から地方に移り住み、多世代と交流しながら健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けることができるような地域づくりを目指すものである。その日本版 CCRC を実践しているシェア金沢を視察し、地域の支えあいについて学ぶことが目的である。

B) 活動日

2015年11月30日(月) 10:30～12:00

C) 活動の内容

シェア金沢での取り組みについて講義を受け、その後シェア金沢全体の様子を見学した。

D) 活動の考察

シェア金沢はこじんまりとしており、お互いの顔が見える関係性を築きやすく、職員の日も行き届きやすいというメリットがある。このことにより、高齢者の見守り体制がしっかりでき、高齢者が安心して暮らせるまちづくりができると思った。

次に、シェア金沢には子どもから高齢者まで幅広い世代が住んでおり、その中で私たちのような大学生は自分の得意なことを生かして地域づくりに貢献している。例えば美大生であれば地域の情報を黒板に絵付きで書いたりしていた。

他には、シェア金沢に新しく来た人が孤立しにくいというメリットがあると思った。シェア金沢に住んでいる人たちは、新しく来た人に対して観光案内などを通して積極的にかかわっている。このように新しく来た人を快く受け入れ地域を作っていくことで、歳をとり高齢者になった時でも周りとの関係がなくなることなく安心して地域で暮らしていけると思った。

E) 活動の課題

シェア金沢はできてからまだ約2年しか経っておらず、周辺の地域との関係が十分にできていない。しかし最近では、近隣の保育所や小学校の児童・生徒がシェア金沢に散歩や写生をしに来るようになってきている。よって今後いかに周辺地域との関係を築いていくかが重要であり、今後のシェア金沢の活動に期待される。

<指導教員のコメント：CCRC 視察>

昨夏「生涯活躍のまち」が明らかになり、東京圏をはじめ都市部にいる高齢者の地方移住の道筋の一つが示された。健康なうちから地方へ移住して生活を始め、その後、

医療・介護の必要度が高まってもそのままサービスを受けながら生活ができるというのが特徴である。研究計画を考えた時に隣県の石川県にそのような場所があることを知り、大いに感激しその視察を切望した。そこからどのような日本の未来が描けるのか、ヒントが近くで得られるかもしれないと感じたのである。地域福祉の推進の中では地域包括ケアシステムの構築が進められてきており、地域包括支援センターが主導して地域の支援困難なケースも地域課題として向き合い、それに対応できる地域づくりを目指していくものである。住み慣れた地域で、その人らしい生活を継続する。このことと、CCRC は内容的に極めて親和的・近接的である。このことを切り口に主に福祉を学ぶ学生らと考え・学ぶ機会とするのを狙いとしたのである。

④アウトリーチ基礎学習（駅周辺の巡回について）

A) 活動の目的

地域に存在する野宿者の実態を知り、地域で包摂するにはどうすればよいかを検討する。

B) 活動日・時間

2015年11月17日(火) 15:00～

C) 活動の内容

富山市の駅周辺で野宿状況を、過去に遡って居所を確認しつつ、変化をみながら問題を考えた。野宿状態にある人と交流(接触)ができれば、その方に現状について話を伺うことを想定していたが、事前調整の通りにはならず、会うことができなかった。

D) 活動の考察(感想・学びなど)

北陸新幹線の開業に伴い、駅は整備されたが、住まいを持たない人が気軽に立ち寄ることは難しくなった。現に、富山駅の地下通路は継続する工事や展示物により、起居する場所ではなくなり、駅北の地下広場も以前にもまして管理が厳しくなっている。

富山駅から少し離れたところでは、公立図書館や城址公園付近、いたち川沿い、駅北の橋の下などが起居の場となりうるが、駅南の巡回では確認できなかった。

E) 活動の課題

今回、野宿者の確認はなかったが、野宿者がいないということの意味するものではない。潜在化して支援が難しくなっている面がある。定期的な炊き出し等の支援活動には参加する人がいること、不定期ながら巡回の際に野宿者と接触できることなどが証左である。

こうした人たちを地域社会で受け止めていくことは、生活保護制度や生活困窮者自立支援制度などフォーマルなものだけでなく、民間のサポートもまた重要であり、今後も継続する課題といえる。

<指導教員のコメント：アウトリーチ基礎学習>

本研究の中で実施する予定であった野宿者に対するアウトリーチは十分な成果を上げられなかった。主な理由は、上述のように北陸新幹線開業に伴い地下を含む富山駅周辺の利用が大きく変化し、野宿の定位置を失ったため、定期的な交流(接触)が極めて困難になったことが挙げられる。ゼミや学部授業でもこのアウトリーチを行ったことがあるが、実際に野宿者と交流できた場合、その前後で学生の野宿者や野宿問題に対する考え方・感じ方が変わり、ネガティブな印象が軽減されることがある。今回はそのことの経験を得ることはできなかったが、地域課題としては認識できたかと思う。

【指導教員のコメント：全体を通して】

単に制度につながれば生活課題が解決し、生活のしづらさが解消されるものではないというのが地域生活の実際である。学生らは、将来、福祉や教育の現場で働くことになることが多いが、地域社会の個々の生活やそれを支える仕組みの様子は実際に地域で確認する必要があること、またそれに基づいて個別具体的に対策を考えつつ、地域課題として解決を考えていくことが必要であることに気づくきっかけになればと思う。また課題に取り組む姿勢として、地域住民と関わる際の「オン」「オフ」の切替の重要さも習得できたとすれば、今後活かせる機会になったと思う。

4. 調査研究の成果

短期間ながら、当初想定していた地域住民との関わり、とりわけ独居高齢者との交流が実施できた。対象者の自宅訪問や地域での相談の場・居場所としてのサロン・カフェ活動らは、これまでにない方策を提示することができた。市町村社会福祉協議会や地域包括支援センターで実施されてきたものがあるが、この活動では制度・サービスを利用しにくい対象者を繋ぐことができたと考える。また、政府が進める「生涯活躍のまち」の先駆けと捉えられている日本版 CCRC・Share 金沢への訪問により、日本の地域社会における将来を考える一つの形を学んだ。今後、全国的に展開されつつある、大学との連携の事例も学びつつ、大学・学生がどのようなかかわり方ができるかを考える契機を得た。

一方、本研究が射程とした社会的弱者には野宿者を含めて考えていたところ、先のまとめのように、当事者と交流し、地域社会での生活に関わる課題を明らかにしていくことはできなかった。

本研究の終了は、上記場づくりの地ならしや今後のあり方を考える最初の段階を終えたに過ぎない。今後、活動の継続を目指して、ゼミを中心に、発展的な展開をしていきたい。

5. 調査研究に基づく提言

本研究が示す提言は以下のとおりである。

- ①制度・サービスの仕組みではつながりきらない社会的弱者を支える地域の仕組みが求められている。
- ②①の仕組みは、従来のものに加え新たなものが求められているのであり、様々な対象者に対応できるような「多層性・多様性」が求められている。
- ③日本版 CCRC の中でも、大学連携のものは、学生を含んだ取り組み（種々の地域活動、まちづくりなど）にすることで、「多層性・多様性」に貢献するものになりうる。

6. 課題解決策の自己評価

4. に示したように、本研究の終了は、新たな展開への端緒に過ぎないが、短期間の中で、地域生活の課題を実際に確認していったことはこの研究ゆえの成果であり、今後活かせるものになったと評価できる。